

都市を文化的景観として見ること

—佐渡相川、京都岡崎の調査から—

1 はじめに

景観研究室では、2010年度より、都市域を対象とする文化的景観の価値評価と保存計画策定のための調査を、受託研究として2件実施している。金銀山を擁する鉱山都市である新潟県佐渡市の相川地区と、疏水が縁取る文教地区である京都府京都市の岡崎地区である。

両地区的調査は、文化的景観の概念を根本から問い合わせことから始めなければならないものであった。農林水産業に関連する文化的景観は比較的理 解しやすいものであるが、都市域をそれらと同列に並べると、とたんにわかりにくくなる。そもそも、都市域における文化的景観とは何なのか。それは都市そのものを指しているのか、あるいは景観だけを抽出するものなのか。価値は何に宿るのか。何によって価値は担保されるのか。

この違和感を解消するには、おそらく、文化的景観をとらえる上で問題設定自体から考え方直す必要があるのだろう。都市域における文化的景観は、農林水産業関連の文化的景観と比べて、次のような基本的な性質を持っている。一つは、異質な要素が多様に存在し、かつ混在していることである。要素相互の関連性を見出すための方法が問われねばならない。もう一つは、都市というものは歴史的に変遷を重ねてきた場所であり、現在に至っても早い速度で変化を続けていることである。変化することが一種の本質である都市域において、その都市を都市自身たらしめているシステムとは何なのか。

相川と岡崎という2つの地区での文化的景観調査の取り組みを、我々は、都市を文化的景観として見ることという新たなアプローチを開拓する行為だと考えている。

2 二元構造都市としての佐渡相川

佐渡相川は、近世初頭より金銀山で栄えた町である。相川の文化的景観は、金銀山とその関連施設、そして多くの鉱山関係者らが居住する市街地部を核とする。ただし、一口に市街地部といっても、近世以来佐渡最大の規模を誇った町場であり、奉行所が置かれた佐渡の行政上の中心でもあり、また鉱山関係だけでなく交易や商業など

多様な生業が営まれていたため、複合的な都市構造を有する。そのいっぽうで、生活・生業の及ぶ土地利用の範囲は金銀山や市街地部を大きく越え、周囲の山林、水田や畠地、海、あるいは佐渡を縦横に通る往還にまで及ぶ。したがって、相川の文化的景観調査を実施するにあたり、都市相川を成り立たせているシステムの全体的な把握、すなわち相川の景観の基本構造の把握がまず必要となった。

景観の二元構造 鉱山都市としての相川は、鉱山と海浜が近接する、いわば「臨海鉱山都市」である。石見銀山をはじめとする近世以前に起源を持つ国内の鉱山都市と比較して、特に顕著な特徴である。この地理的特性は、日本全国からの物資と人材の集積を促した。交易・商業が発達するとともに、各地からもたらされた文化が混淆して独特の文化が形成され、相川は単なる鉱山都市ではない、複合的近世都市の様相を呈することとなった。

相川は、金銀山だけでなく、交易・商業によっても支えられてきた。生業に2つの核があるわけだが、この二元性は、ソフト面に留まらず、ハードとしての景観にも表れている。生態系、土地利用、鉱山関連施設、都市構造と、随所にそれは確認できる。例えば、豊かな植物に覆われている海岸段丘の段丘崖は、市街地中心部ではタブノキ等の保護林、周縁部ではエノキ等の二次林と、対比的な様相を見せる。相川に隣接する集落では、段丘上下で水田耕作と居住とが明瞭に分離されている。都市構造に関しても、鉱山都市としての上相川・上町と交易・商業都市としての下町、上町のなかでも鉱夫が多く住む大工町と地役人・三菱職員中心の町である京町周辺、といった対比が至るところに表れる。

二元構造の歴史的持続 相川における二元構造を時間軸の中に置いてみると、また違った一面が表れてくる。二元性の核をなす諸要素はその内容を変化させてきたが、二元構造自体は持続してきた、という一面である。例えば、明治を境に金銀山が幕府直轄支配から三菱鉱山へと転じる中で、上町の中心部である京町は、地役人等の町から三菱職員の町へ、構造を維持しながらの転換を果たしている。下町においては、交易都市から観光拠点都市へと転換したが、鉱山との間接的関係は持続している。

二元構造という概念を軸にすることで、都市相川は、多様な諸要素が相互に関係を有して一体をなす文化的景観へと、その見え方が変わっていくように思われる。



図21 二元構造を持つ鈴山都市相川



図22 大規模土地利用と水利用がつくる岡崎の景観

3 園池後背地としての京都岡崎

京都岡崎といえば、東山を借景に琵琶湖疏水が流れ、博覧会跡地に文教施設が建ち並ぶ、近代の良好な都市景観がすぐに思い浮かぶ。この地区を文化的景観としてとらえることは、近代京都に作り出された都市景観の中でも突出して文化の薫り高いこの地にふさわしく思えよう。しかし、文化的景観としてこの岡崎の地を保護するとなると、一体、何が守られるべきで、何が更新されてもよいのだろうか。そもそも、岡崎の地が京都の他の場所から差異化される理由とは何か。岡崎を文化的景観ととらえることは、その価値の本質への問い合わせもある。

岡崎の現在の景観は、そのほとんどが近代以降に形作られたものである。平安神宮、岡崎公園、琵琶湖疏水と、中心施設はいずれも明治以降に設けられている。したがって、岡崎の文化的景観を近代の土地開発によって形成されたものと理解するのは、至極真っ当である。

しかしそくみると、近代の開発以前に村落をなしていた旧岡崎村や聖護院、あるいは近世中期の御所拡張の代替地として開かれた岡崎公園西側の一角等の、岡崎公園周辺を通る道は、整然と区画された岡崎公園の街路と軸線が通っている。この岡崎公園の街路は、実は周辺道路に規定されて形成されたものなのである。この岡崎周辺の道路パターンの形成は、平安時代の白川街区の形成に遡る。岡崎の景観の形成過程を厳密に遡るなら、近代の問題に留まらず、平安時代から検討を始めなければならないことになる。すなわち、岡崎は、より広い範囲、より長いタイムスパンにおいて理解されるべき場所なのである。

古代の岡崎は、園池式伽藍を有する寺院群である六勝寺が開かれた場所であった。六勝寺が衰退した中世～近世には畠地が広がり、蕪、大根、茶の栽培がおこなわれた。京都が政争の場となった幕末に武家屋敷として用いられたが、再び畠となり、明治に入って琵琶湖疏水のルートが畠地の縁を縫うように定められた。この岡崎の長い

歴史には法則性がないかにも見えるが、常に大規模空地を活かした土地利用がなされてきた点で共通する。

また、積極的な水利用も、古代以来この地で継続してきた。六勝寺の園池は白川の流れが前提となったものだろうし、琵琶湖疏水についても、発電だけでなく、多様な方法で水を使い尽くすことが意図されていた。岡崎の西部、夷川の船溜近辺には水車小屋があり、工場利用されていた。

大規模空地と徹底した水利用は、岡崎を歴史的に京都の後背地（ヒンターランド）として機能させる原動力となってきた。他の京都郊外地と岡崎とを区別するのは、この土地利用の特性と、それが歴史的に持続してきたことであろう。この土地利用のあり方は、この地が白川によって作り出された扇状地であることと関連しているものとみられる。扇状地ゆえに池を設けやすく、またいっぽうでは農地としての利用が制限されるからである。白川が作り出した地形・地質によって土地利用が無意識的に導かれてきた、いわば園池後背地とでもいうべき特性を、岡崎は有している。岡崎の文化的景観は、こうした見方において、一つの像をなしてくれるものと考える。

4 都市域における文化的景観とは

都市というものは自明なものではない。文化的景観の観点から都市を見る行為は、この自明でない都市のとらえ方に新しい視角を持ち込むものであるように思う。

人間と風土の相互作用という見方を基礎に置く文化的景観の考え方からすれば、都市も風土の中にあるものとしてとらえるべきことが促される。確かに、都市は抽象的な存在ではなく、地面の上に根を生やしている。それは地形の上、さらにいえば、地質の上に成り立っている。それゆえに、都市は慌ただしく変化しながらも、都市それ自身で在り続けるのだろう。文化的景観としての都市の歴史的持続は、土地それ自体が、第一義的に保証してくれるわけである。相川と岡崎の文化的景観調査は、こうしたことに目を開かせてくれつつある。（清水重敦）